「ハタハタ」 秋田も富山も漁獲量激減

深層水で親魚養成

ハタハタは、スズキ目、ハタハタ科に属し、冬の日本海に雷鳴がとどろき、海が荒れるころにやってくる。

秋田県の魚として有名だが、富山湾にも12～1月ごろ、産卵のために接岸する。日本海には、秋田県沿岸を産卵場とする日本海北部群、朝鮮半島東岸を産卵場とする日本海西部群があり、後者は山陰沖が漁場となっている。富山湾に来遊する群は日本海北部群に属すると思われるが、産卵親魚が漁獲されることから、局地的な回遊を行う地域群とする意見もある。

近年、日本海北部の漁獲量が激減し，本場の秋田県では平成4年9月から平成7年6月まで独自に三年間の禁漁に踏み切り、資源管理の推進、産卵藻場の造成、種苗放流などによる資源の回復も試みらている。富山県でも百トン台の漁獲量が数トン台に落ち込んでいる。

ハタハタは産卵期に藻場の発達した沿岸域に回遊するため、比較的収率の高い栽培漁業種である。平成9年度から県水産試験場では，日本栽培漁業協会能登島事業場と共同で、深層水を利用した親魚養成に取り組んでいる。

約5cmの稚魚を深層水と表層水を混合して使用し，魚肉ミンチと配合飼料を餌に養成したところ，1歳の秋から初冬にかけて自然産卵することが明かとなった。また，2歳、3歳の自然産卵にも成功した。

ハタハタは自然界では，水深5mよりも浅い藻場で産卵する。放卵数は600から2,300粒。卵径2.8から3.8mmの球形粘着卵を団子状に海藻類に産み付ける。平成11年度には43個の卵塊，平成12年度には362個の卵塊，平成13年度には330個の卵塊が得られた。この養成親魚から得られた卵をふ化させ，種苗の生産にも成功している。（堀田和夫）

人工藻に自然産卵したハタハタの卵塊